



第 8 2 号

発行日

2014年3月1日

発行

茅ヶ崎市立小和田公民館

茅ヶ崎市美住町6番20号

(TEL 0467-85-8755)

(FAX 0467-85-8788)

mail:kou_kowada@city.

chigasaki.kanagawa.jp



◎ 内 容

- ★ 茅ヶ崎を知ろう第2弾「山田耕祐と茅ヶ崎」
- ★ 公民館お掃除隊！
- ★ 親子でエコバッグ作り
- ★ 健康講座「超びっくり！ 腸のいい話」
- ★ うたのひろば
- ★ 公運審だより・茅ヶ崎の社会教育を考える会
- ★ 公民館のぞきみ隊 子育てサークル

たんぽぽ・なのはなサークル・いちごサークル・ひまわり

- ★ 地域で活躍する中学生
- ★ 職員紹介、編集後記

「山田耕筰と茅ヶ崎」

～みんなで歌おう 「赤とんぼ」～



夕焼、小焼の / あかとんぼ / 負われて見たのは / いつの日か。

夕やけ小やけの / 赤とんぼ / とまっているよ / 竿の先。

序奏 2013年9月25日



茅ヶ崎市民活動団体〈「山田耕筰と「赤とんぼ」を愛する会」〉(代表 鈴木道子)(以下、「愛する会」と略称)が、この日の午後、小和田公民館で講座を開いた。「茅ヶ崎ゆかりの人を知る企画」(館長挨拶のことば)に、参加者は定員60名をはるかに超え、熱気あふれる講演であった。



第1楽章 「赤とんぼ」は昔も今も



赤とんぼを「負われて見た」子どもは、だれの背に負われていたのか。率直に考えれば、3番の歌詞に出てくる「姐や」だろう。いや違う、この歌が懐かしむ背中では姐やではなく母親のそれだ。そんな論争があったと、ある本で知った。

NHKが1989年に作成した『日本のうた ふるさとのうた 100曲』の8割を童謡・唱歌が占め、その第1位に三木露風の「赤蜻蛉」が選ばれた(畑中圭一著『日本の童謡—誕生から90年の歩み』)。

声楽家の鮫島有美子さんが学生に「日本の歌で何を残したい？」と聞いたら、「赤とんぼ」をあげたという(「朝日新聞」2013.7.5号)。

第2楽章 「^{スキャンボ}酸模の花咲く頃」

集まったのは60代、70代がほとんど。80代の人参加した。子どもの頃、道端の酸模をむしり取って食べ、その酸っぱさを味わったことのある人たち。その名を聞いただけで、ごくりと唾をのみこんでしまうような人たちが、この講座に参集した。「酸模の花咲く頃」は大正15年11月8日作曲とある。大正15年は山田耕筰が茅ヶ崎へ引越して来た年。「松翠香る茅ヶ崎の砂丘に愛児らと心ゆくまで戯るゝとき、月夜遠浪の音に聴きほれて……私の創作意は……生々として萌えいづるのでありました」(『山田耕筰全集【1】』)と、創作意欲に燃え「赤とんぼ」などを作曲した。

当日配布されたプリントによれば、「赤とんぼ」は昭和元年12月27日作曲という。



第3楽章 みんなで歌いましょう



「愛する会」の内山喜代子先生の歌唱指導で20曲余。息をたくさん出し高い声で歌うという、歌う健康法を学びながら、まず、さかのぼり童謡史～神奈川の旅～12曲。「みかんの花咲く丘」（昭和21年・小田原）、「赤い靴」（大正12年・横浜）、「七里ヶ浜の哀歌」（明治43年・逗子）など。みんなそれぞれ、自分史を重ね合わせながら歌ったのではないだろうか。

明治43年は山田耕筰24歳、ドイツ留学を果たした年である。「七月の二十七日の夕飯後、宿の側を流れるシプレエ河に添うてしずかに歩き、リンデの樹陰に座った。手には『廃園』があった。しかし、口は知らぬ間に、露風の詩『嘆』を歌っていた（山田耕筰著『はるかなり青春のしらべ』）。山田耕筰は三木露風の詩集を旅の友とするほど、露風の詩に深く心を寄せていたのであろう。

第4楽章 山田耕筰を次世代へ

「あの有名な山田耕筰が我が家の家作で赤とんぼを作曲したのですから、私の敷地内に山田耕筰が住んでいて作曲した場所という曲碑版が建ったことは嬉しいかぎりです……これを見た方々が何時までも童謡を歌い継いでほしい」と、山田耕筰一家に家作を提供した人の話として、伝えている（「愛する会会報」）。曲碑版は南湖の旧鉄砲道に沿って建っている。

帰宅する子どもの安全のために流れる「夕方のチャイム放送」が、なぜ「赤とんぼ」なのか、内山喜代子先生は語った。山田耕筰の長男耕嗣氏が「愛する会」の市民活動に賛同され、父をぜひ茅ヶ崎の空に飛ばしてほしいと言われた。子どもの情緒安定のために、との市側の意向もあって、夕方のチャイムを「赤とんぼ」にした、と。



第5楽章 フィナーレ

「愛する会会報」によれば、昔も今も、老若男女を問わず、第一に「口ずさめる」歌であるという。歌唱指導の最後は「赤とんぼ」。「赤とんぼ」にも2種類あることなども学んだ。緩息法という呼吸法も習い、たくさんの歌を歌った。終わるころには、みんなの声帯が若さを取り戻したかのように、会場いっぱい、びんびん鳴り響いた。「子どもの前で歌いたいですね」と内山喜代子先生が問いかけた。みんなは「うん」とうなずいたような……。

参加した人たちの多くが「楽しかった」と感想を述べ、なかには「元氣になれた」という人も。山田耕筰のことが「よくわかった」「とても勉強になった」という人も。参加者は、童心のような笑顔で会場を後にした。

（佐々木 勝治）



公民館お掃除隊！



「公民館お掃除隊！」は次のことをねらいとして実施します。

- ① 子どものボランティア精神を養い、公共施設等を大切にする心を育む。
- ② 異年齢集団のなかで、協力し合って活動する楽しさや大切さを知ってもらう。
- ③ 美化活動を通じて、大人と子どもの交流を図り、つながりのある地域づくりをする。

I なぜ、小学生の「お掃除隊！」なのですか？

公民館お掃除隊！（以下、お掃除隊！と略称）は、平成22年度の新規事業として企画されました。今回は4回目に当たります。第1回お掃除隊の記録によれば、「対象は小学生。親でない大人と一緒に活動し、一緒に学び、そうすることで地域に気軽に声を掛け合える大人と子どもの関係をつくれたら」との願いを込めて企画された事業です。

「親でない大人」として、青少年指導員、公民館運営審議会の委員、公民館でサークル活動をしている人たち、花屋さんなどの参加協力がありました。

II 7月7日（日）～仲間づくりのゲーム遊びから～



作業準備は第2学習室で、まずはドラえもん・ゲームから。1つの机に3人ずつ横に座りチームをつくれます。子どもは7人なので3列目は子ども2人と大人1人。3種類のカード（のび太、ドラえもん、しずか）を数枚ずつ袋に入れておきます。青少年指導員のリードのもと、縦1列の3人が指導員とジャンケンをして勝ったら、カードを1枚引く、第2列目の子、続いて第3列目というように、ジャンケンを続け、同じカードを3枚集めたチームがあがりというゲーム。カードを引くたびに歓声があがり、床を駆け回る子も。

今日の作業順序の説明を聞き、名前付きの隊員キャップをかぶり、エプロンをつけて移動。活動している部屋をちょっと見学。太極拳をやっている部屋では、一緒にやり始める子もいます。ロビー清掃はグループ単位で、職員・協力員・母親らと一緒に、30分以上かけて、きれいに為し終えました。休憩の合間に、外に出ていたMちゃんが、ゴミ拾いをしていました。



III 9月7日（土）～まじめにやらないと手を切るぞ～

指導員は村岡昭朗さんと田中英治さん。共に初回から協力し続けてきた人たちです。障子張り替え作業は子ども室で。「思い出したかな」と言いながら、初めに手本作業をして見せてくれました。刷毛の持ち方、糊のつけかた、「カッターは斜めにもって」と。次は子どもたちの番。2人ずつ2組に分かれて、一度に2枚仕上げます。指導員は子どもに手を添えて、まずは、糊つけ。「やっている人のをよく見てと注意を促します。紙をカットする場面では「まじめにやらないと手を切るぞ」と厳しい言葉も出ます。1枚できあがるごとに講義室へ運び、仕上げの霧吹きを待ちます。終わる頃には紙の切り方もスムーズ

にできるようになり、14枚の障子張り替えは2時間ほどで終わりました。

締めくくりは指導員村岡さんと田中さんのマジックショー。見事な手さばきに子どもたちは大興奮。「もう1回やって」と子どもたち。「マジックは1回だけ」と、手品の名手はきりかえます。最後に切り紙で鶴をつくりました。

IV 10月6日（日）～洗剤を使わないで重曹とクエン酸のみで～

小和田公民館の実習室を利用してパン教室の講師をしている豊田玲子さんを迎え、調理する環境を衛生的にするという観点から、洗剤を使わず重曹とクエン酸のみを用いて清掃を行い、環境にも人体にもやさしい方法できれいにできることを学びました。具体的には重曹を溶かした水で雑巾を絞り、拭き掃除をすると油污れがよく落ちます。クエン酸は水の中のカルシウムが固まった水垢や石鹸垢が落とせるし、除菌効果もあるといいます。

重曹水溶液をつくり、台布巾でコンロや調理台をきれいにしました。排水溝には重曹とクエン酸で洗浄し、お湯を流して完了。

大人と一緒に踏み台に乗って食器を整理し、きれいになった状態をデジカメに収めました。後日、片付け見本として食器棚に貼る予定だそうです。



V 11月3日（日）～こういうのを「たがやす」というんだよ～

『リサイクル土』の話をしましょう。「リサイクル土って?」「お花を植えていた土をきれいにして、もう一度使う土のこと」今日の指導員は大谷美恵子さん。子どもたちと対話しながら、花のプランターづくり。「まず、篩（ふるい）を使って木屑などを取り除く。培養土と肥料を混ぜる」「こういうのを『たがやす』と言うんだよ」「こうやって一度使った土を、もう一度使うことができるんだよ。お母さんにも教えて」

花は正面を揃えましょう。奥の方にノースポール、手前にパンジー。割り箸で土の隙間を埋め、沈んだ分の土を追加します。水はホースで、なるべく花にかからないように。プランターの下から水が出てきた。早速、砂遊びがはじまりました。花は生き物。霜がおりる真冬には、表面が乾いてきたと思ったら、10時過ぎごろに水をやりましょう。「10時すぎ?」と子どもが反応します。

実習室にもどってプレートづくり。自分がつくった花壇に立てるプレートに、それぞれの「ことば」をカラフルに描きました。「花をたいせつにしよう」などなど。



VI 公民館お掃除隊! からのメッセージ

12月14日（土）の公民館大掃除には100人近い大人が参加しました。この日のお掃除隊はなかよしルームで、普段大人がやっているおもちゃの消毒を自分たちだけでやりました。

年が明けて1月は美化ポスター作り。「公民館をきれいにしよう」「次に使う人のためにもきれいにしよう」「こうみんかんにごみをすてちゃだめ」「ゴミは家にもってかえってぶんべつしてからすてようね」。これらのメッセージはお掃除隊の子どもたちが自分で考えて作ったものです。

（佐々木 勝治）

親子でエコバッグ作り

平成25年8月11日（日）

10:00～12:00

講師 鈴木 光子 氏

参加者 親子3組

普段何気なく目にしている、新聞紙の広告で、かわいいな～、とか、すてきな～と思った部分を使って、自分だけのバッグ作りに挑戦した。

はじめに、講師が持ってきてくれた見本を見て、「いろいろな形のバッグが出来るんだね」と親子の会話。練習を兼ねて1つ作りはじめた。新聞紙の折り方から始まり、のり付けの位置や模様の出し方、バッグの大きさを決め、親は親、子どもは子どもで取り組んだ。子どもの手元を見ながら、「こうやるんじゃない」など親が声をかけると、「うん、知ってるよ」など子どもは子どもなりに理解をしていた。完成したところで、みんなのバッグを見比べ、「この柄、良かったね～」「こんな感じになるのね」など、感想を言いあっていた。

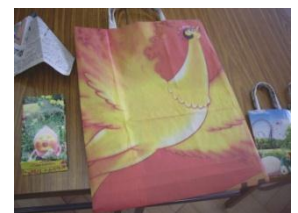


もう一つ、次は一番大きなバッグ作りに挑戦。今度は、親が夢中になって、「子どものを見てる余裕ないわ」と笑い声。手順は同じなのに大きさがかわっただけで、こんなに苦労するなんて……と親の本音（？）も飛び出し、講師の手助けを求めている。広告を持ってきた子どもは、小さなバッグができ、ニコニコ顔である。かわいいねえ～、いいねえ～、楽しかったねえ～など、それぞれの

を見ながら、自己満足（？）気な様子だ。アンケートにも、家に帰ったらかわいい新聞紙を探して作りたい、もっといっぱいほしい、など親に話している子ども。そうだねえ～と返事をする親。その後、家に帰ってからバッグを作ったかどうかは、いつか聞いてみたいなあ～、と思いながら楽しかった時間が終わってしまった。



環境問題を考える手立ては、たくさんあると思う。エコについて、これからもっともっというんな知恵を出し合い、限りある資源を大切に、有効利用していかなければ。それは、私たち大人の責任でもあり、子どもと一緒に考えて考える永遠のテーマではないだろうか、と思ったりもしている。



（川田 昌子）

「健康講座」 超びっくり！ 腸のいい話

日 時 平成25年11月22日（金）
10:00～11:30
講 師 葦津 幸子 氏
茅ヶ崎市立病院栄養科 管理栄養士
共 催 市保健福祉課
参加者 45名



はじめに、小和田公民館・米山館長から講師の紹介があり、早速講座に入った。スクリーンに映っているパワーポイントの図は、資料として私たちの手もとにも配布されている。



最初は、「腸の構造と働き」に関して。

びっくりしたのは小腸だ。大腸は1.5m、直腸は15cmに対し小腸は3m。入り組

んだ壁を開くと200㎡もあるそうだ。われわれの体内には、庭つき一戸建住宅が納まるくらいのものが蔵われている。スゴイ！

ついで、「栄養摂取方法」

栄養を摂るには、静脈を経て摂る（点滴）、腸を経て摂る（管による鼻や胃も含め）の二方法がある。しかし、腸を使わない摂取が長くなると、腸内環境が悪くなりやすいので、当然のことながら、「栄養をとるために、腸は超重要」なのである。

次に「腸内環境を整えるため」の栄養としての食物繊維、糖質、水分などについて種々説明があったが、結局はバランスのよい食生活が一番、ということになる。

健康を保つには、栄養に加えて運動も必要。

「体を動かす（腸を動かす）→栄養を吸収しやすくなる→お腹がすく→栄養を吸収しやすくなる」こうすることで、好環境が循環する。

最後に、「もうひとつ大事なことは、よい習慣を継続させること、栄養も運動も楽しく取り入れてほしい」を結びの言葉とされた。

誰もが願う「健康」に関するお話なので、みな、関心が深かったようだ。今回は、市保健福祉課との共催なので、高齢者の参加が目立った。

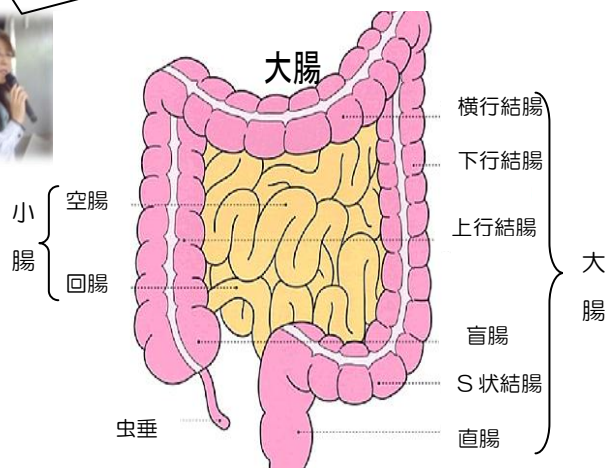
参加者から、たくさん質問がだされ、講師からの丁寧な答えに、うんうん、とうなずく方も。



アンケートにも、「腸内環境を整え、食事と運動で健康でありたい」など、関心の高さがうかがえた。

〔保健福祉課より〕

市では様々な検診を行っています。個人でかかるより費用が安くなります。是非、ご活用ください。詳細は市役所までお問い合わせください。



（青木 君子）



「うたのひろば」

～歌い継ごう 心に残る歌を！～

みんなで一緒に歌いましょう！ 年間共通テーマは「家族」です



茅ヶ崎市立小和田公民館講義室にて
平成26年1月26日（日）自由参加

小和田公民館での「うたのひろば」は年3回（5, 9, 1月）開催されました。
まずご挨拶代わりに「うたのひろば・テーマソングの『加山雄三通り』」を会場の皆さん全員で合唱しました。

演奏されるのは「心に残る歌を歌い継ぐ仲間たち」4名（男性2名、女性2名）のグループです。

★歌集「2013 うたのひろば みんなで一緒に歌いましょう！」より

- ・「加山雄三通り」
- ・「かあさんの歌」 日本の歌 100 選
- ・「シューベルトの子守歌」
- ・「夕方のおかあさん」
- ・「my bonnie lies over the ocean」
- ・「峠の我が家」
- ・「新雪」
- ・「寒い朝」
- ・「浜千鳥」
- ・「早春賦」 日本の歌 100 選
- ・「どこかで春が」
- ・「うれしいひな祭り」 日本の歌 100 選
- ・「北国の春」
- ・「おもいでアルバム」 NHK「みんなの歌」
- ・「高校三年生」 日本の歌 100 選
- ・「星めぐりの歌」
- ・「チャコの海岸物語」
- ・「翼をください」 日本の歌 100 選

など18曲を歌いました。休憩を挟んで、メンバーの自己紹介や、12月、1月、2月、3月生まれの方への「ハッピーバースデー トゥーユー」の歌のプレゼントがありました。1曲歌い終わると「懐かしいわねえ～」「あの頃は……」など若かった当時を思い出すような声も聞こえてきました。

3回とも参加された方が6名もいらっしゃいます。

これからも一緒に歌っていきましょう。

◎次回は2014年（平成26年）4月26日（土）10：00 からです！

（佐藤博範）

公運審だより

任期2年目となる公民館運営審議会です。今年度も審議会でも討議を行ったり、主催事業に関わったりしてきました。また、研修会にも積極的に参加しています。市や県主催の研修会参加はもとより、市内の5公民館で組織された公運審連絡協議会では、自分たちで研修会を企画、運営します。



公運審連絡協議会主催の研修会は10月3日に開催されました。幹事である香川公民館の公運審会長の挨拶の後、「アイスブレイキングゲーム体験」をしました。小和田の委員である私（安藤）と南湖の委員の鈴木さんが講師となり、地域のイベントや会議で役立つ導入ゲームなどを行いました。その後はメインであるワークショップですが、5グループに分かれてそれぞれのテーマに基づき話し合いを行い、その内容を発表し、皆で情報を共有しました。より良い公民館を作るために私たちができることは何だろう……。どの委員も思いは同じでした。これから県主催の研修会等も開催されます。私たち委員はその中で学んだことを公民館や地域の皆様に活かせるよう頑張っていきたいと思います。

（安藤 敏恵）

今年度は、安田賢次委員に代わり、渡辺俊幸委員が新しく松浪地区自治会連合会から推薦されました。



「公運審委員としての抱負と公民館に望むこと」

社会教育法のある通り、「公民館は实际生活に即する教育、学術及び文化に関する事業を行う」としています。60年以上経過した今日では、高齢化に対応したさらなる社会教育の強化が期待されます。自治会としても、現役層（30、40、50代）をさらに誘いこみ、成人社会で期待される活動も支援したいと考えております。

（渡辺 俊幸）

わがグループ 「茅ヶ崎の社会教育を考える会」

遡ること38年前になる。1975年市民教養講座に参加した子連れの母親たちが、子連れでも安心して受講できるように保育をしてほしいと願い、教育委員会と話し合った。「公民館があれば、保育ができる」と聞いて、公民館をつくってほしいという要望書を市と教育委員会に提出。まず公民館について勉強しようと市民学習グループ「公民館について勉強する会」をつくり、教育基本法、社会教育法などの法規や公民館の歴史について学習する。公民館づくりの運動も併せてやっていこうと運動体を別につくることにした。1976年4月「茅ヶ崎市に公民館をつくる会」を設立。これが、わが会の前身である。教育委員会との話し合いや市長交渉を地道に重ねて、第1号の小和田公民館が開館したのは1980年である。市の総合計画にも公民館建設が入り、1982年鶴嶺公民館、1983年松林公民館、1985年南湖公民館、1989年香川公民館が開館した。

会報「息吹き」を発刊したのは1977年1月である。当初はガリ版刷りで毎月出していたが、送料の値上げなどもあって隔月刊（年6回）となり、現在は季刊（年4回）で発行している。2012年8月に『息吹き 公民館づくり 書き続けて300号』『息吹き「私の8月15日」』というまとめ誌を出版した。

公民館5館ができた後は、会を存続するかどうか議論し、茅ヶ崎の社会教育を考えていこう、ということで名称を変更して今に至っている。現在でも、会員は50名ほどいて、月1回、おしゃべり会と称した例会を持つ。そこでは自由に意見を述べ合い、情報交換をし、「月刊社会教育」を読む会も続けている。毎年8月に行われる社会教育研究全国集会には会員の複数が参加している。



（西山 正子）

公民館のぞきみ隊

小和田公民館には、4つの子育てサークルがあります。
今回は、このサークルの活動を紹介します。



たんぽぽ

たんぽぽは、月3回、金曜日に小和田公民館で活動している未就園児を対象としたサークルです。今年度はたくさんさんのヨチヨチさんも新しく加入してくれて、既にワンプクキッズに成長した子を持つママたちに、ちょっとした癒しをもたらしてくれています。

普段の活動は、子ども室を利用して手遊びや工作、お砂場遊びなど。子ども室の前には砂場があり、夏はプールも楽しめます。庭は子どもたちにとっては絶好の遊び場！ 好奇心のままに探索を楽しむ様子も見られます。誕生会や七夕、ハロウィーンやクリスマス会など季節のお楽しみはもちろん、たまには公民館を飛び出して工場見学や遠足、サークル合同運動会、お芋掘りなどの活動も行っています。

サークル活動はママたちの手によって運営されていますが、子どもたちの笑顔のため……はもちろん、たんぽぽの活動を通して地域の方々とつながり、ママ同士でつながり、子どもたちだけでなく、母親たちの世界もどんどん広がってゆくように感じます。



一人では息が詰まってしまうような時も、公民館に行けば仲間がいる。そんな心強さもついてくるサークル活動は、個性豊かなママたちと、笑顔も泣き顔も可愛くてたまらない元気いっぱいなたんぽぽっ子たちと共に、今年もにぎやかな時間を過ごしています。

(下村 さなみ)



なのはなサークル

皆さん、こんにちは。
未就園児を対象とした親子サークルです。私たちの活動を紹介させていただきます。

今年度は、新しいお友達がたくさん入ってくれました！ 最初はママも子どもたちも緊張していましたが、最近ではワイワイ交じりあいながら（時にはケンカも?）遊ぶようになってきました。母親同士も子どもの話を通して打ち解けられてきたようです。

毎回行うことは、輪になって「お名前は?」と隣のお友達に聞いていきます。子どもたちにとって、大勢の前で名前を言うことはそうそうありません！ もじもじ恥ずかしそうに小声だったり、ママの後ろに隠れたり、そんな子どもたちがちゃんと言えるようになってきたり、成長がよく分かります。

その後は絵本を読み、CDを使って手遊びをし、自由遊び（砂場や室内）となります。時間がきたらお片付けをしておやつを食べる準備をします。やりたい盛りの2歳児たちは机を出すのも、拭くのも手伝ってくれてとても頼もしいです。最後は、さようならの歌をうたっておしまいです。

その他、季節ごとにイベントも行っています。夏はサンドイッチパーティー、プール、スイカ割り。秋は遠足、お芋掘り、ハロウィーン、運動会。冬はクリスマスパーティー、お別れ会等々。親子で楽しむことを大切に活動しています。



(平田 麻里子)



いちごサークル

いちごサークルは、未就園児と保護者のサークルです。毎週木曜日の午前中に活動をしています。主な活動場所は小和田公民館で、工作・シャボン玉遊び、誕生会、季節のイベントなどを行っています。月1回、公園などで外遊びの日もあります。工場や消防署へ見学にも行きます。

公民館での普段の活動は、歌を歌いながら、一人ずつ「〇〇ちゃん」「はい」と呼ぶ、お名前の歌から始まります。次に季節に合ったその月の歌を歌い、工作やイベントなど、その日の活動を行います。最後におかえりの歌をうたって解散です。



スイカわり

7月にはすいか割りをしました。新聞紙で作った棒で、みんなですいかをたたきました。結局、包丁で切って食べたのですが、みんなでたくさん食べました。メンバーを卒業した上の子たちも、夏休みのため一緒に参加して、とても賑やかでした。

同じくらいのお友達と遊ぶことができるので、子どもたちもサークルの日を楽しみにしているようです。母親たちにとっても、幼稚園のことや子育てのことなど情報交換できる貴重な場になっています。

サークルは、いつでも見学・入会自由です。

(程島 奈津美)



ひまわり

ひまわりは1987年から活動している育児サークルです。現在は未就学児と母親が20組ほどで毎週水曜日10～12時に子ども室で行っています。

普段の活動内容はブロック遊びなどをしてからお決まりの歌をうたってスタート。親子で手遊びをしてその後メイン遊びをします。当番の人たちが考えた制作や季節にちなんだ遊びを親子で楽しみながら和気あいあいと過ごしています。最後におやつを食べて絵本の読み聞かせをしています。また、課外活動として、施設見学に出かけたりしています。

今年度はバス乗車体験、カステラ工場見学、消防署見学、白バイ・パトカー乗車体験、お芋掘りなどを予定しています。その他にお誕生会、合同運動会、クリスマス会、お別れ会などのイベントも行っており、年度末には思い出作りとして文集制作もしています。

年齢もタイプも違う子どもたちも定期的集まることでお互いを意識し、色々な刺激を受け合いながら成長し、いつの間にか元気に仲良く走り回っています。

初対面同士だった親たちもだんだん表情をほころばせ、楽しそうに話し合っています。お互いの子どもの成長を見守り、おしゃべりする時間を共有することで育児にも張り合いが出てくるのかもしれません。親子にとってのリフレッシュの場であればと、願っています。



お芋ほり



(望月 彩)

地域で活躍する中学生

「焼きそばいかがですか〜」「おいしいですよ」「油を足して」「あと何回転？」

今日は、大雨、強風……。「こんな天気は初めてよ！」とは、本部役員のつぶやき。さすがに体育館入口だけではお客さんも少ないから、屋内へ出前販売に行かなくては！ 中学生に声をかけて一緒に、いざ、4棟教室へ。「出張販売に来ました〜」「あらあ、買おうと思っていたのよ。よかったわ」「ありがとうございます、200円です！」。

10月20日の日曜日。松浪小学校で行われた「福祉ふれあいまつり」の一コマです。私が所属する松浪小学校区青少年育成推進協議会（通称：青推協）では、模擬店の一つとして焼きそばを売っています。ここでの売り上げが、地域の皆さんと一緒に楽しむ「みかん狩り」の費用となるため、この雨で売れるかが心配なところです。

この日、松浪中学校と浜須賀中学校の生徒の皆さんは、主催者の松浪地区社会福祉協議会によるボランティア募集に大勢集まってくれました。模擬店だけではなく、遊びや体験のコーナーを担当したり、前日の展示準備から片付けまで、様々なシーンで大活躍。

毎年、中学生ボランティアは、青推協の模擬店でも汗を流しながら焼きそばを焼いたり、声を張り上げて売り子をしたりと、頑張ってくれます。中学生のパワーを当てにして（?）、オジサン、オバサンたちは、若者をしっかりとこき使っています。この日は悪天候にもめげず、一生懸命働いてくれました。

もっと焼かないとだめ
じゃん？

こんなもんで
いいんじゃない？

おこげ
くいてえ〜

中学生本音トーク???



中学生は、他にもたくさんの行事にボランティアとして活躍しています。

たとえば、各小学校区にある青少年育成推進協議会では、茅ヶ崎市の委託を受けて子ども大会を行ったり、他にも地域交流の行事などを催したりしていますが、松浪中学校と浜須賀中学校の生徒は、松浪、緑が浜、汐見台、浜須賀小学校区の行事でボランティアをしてくれます。地域の大人たちにいろいろなことを教わったり、また、小学生たちと一緒に様々な遊びにチャレンジしたり、教えたりしてくれます。



「松浪小学校子ども大会」の様子

地域の行事だけではなく、社会教育施設である小和田公民館でも中学生は大活躍です。

1月に行われる「子どもの広場」では、浜須賀中学校の卓球部の皆さんが子どもたちに卓球を教えてください。私ごとではありますが、自分が公民館の社会教育嘱託員だった頃、初めて中学生にボランティアを頼んだのが、この「子どもの広場」の卓球でした。以降、「子どものクッキング」で松浪中学校、「おもしろいっぱい遊び空間」では松浪と浜須賀の両中学校に交代でボランティアをお願いしたり、「こわだ音楽祭」では松浪中学校美術部に装飾を依頼したりしてきました。

部活動に勉強に忙しい中学生にこんなに依頼してもよいのだろうかと思うこともありましたが、浜須賀中学校も松浪中学校も、校長先生がいつも「中学校は保護者だけでなく、地域の皆様にも支えられている。子どもたちは、ボランティアをすることによって自分が必要とされる喜びを感じ、地域の皆様とふれあうことによって成長していくんです」とおっしゃってくださいます。ボランティア担当の先生方も人集めにご苦労されていることだろうと思いつつも、校長先生のその言葉に甘え、また、中学生の頑張りを見ることを楽しみに公民館や青推協の行事に取り組んできました。

さて、公民館ではたくさん子ども向け事業に取り組んでいます。なかでも年に3回行われる公民館と青推協共催の「おもしろいっぱい遊び空間」は大きな行事の一つです。中学校の定期テストの日程を気にしながら、松浪と浜須賀の両中学校に交代でボランティアを依頼しています。

この日は公民館全館が小学生の遊びや体験の場となります。12月8日に行われたときは、松浪中学校の生徒16名が「傘袋ロケット」「プラバン」「キラキラデコ」「ミュージックベル」の4コーナーに分かれて、小学生に教えてくれました。

その時の中学生の感想を写真と一緒に……どうぞ！（^◇^）

ミュージックベル

楽譜の印を見ながら鳴らして
皆で演奏♪ジングルベル♪



自分も最初はできな
かったけど覚えて、子ども
たちに教えるのが楽し
かった！

キラキラデコ

キラキラした飾りを貼ってオリジナル
ケース作り♡



子どもたちのうれしそ
うな顔がよかった！

忙しかったけど
やりがいがありました！

プラバン

透明なプラスチックに絵を描いて
熱すると、可愛いアクセサリに♡

傘袋ロケット

傘を入れるビニール袋に空気を入れ
て部品をつけたらロケットだ★皆で
宇宙に見立てた的へ飛ばそう★



自分たちにとっては普通にで
きることも小さな子にはでき
ない。それを教えるのに苦労
しました！

「傘袋ロケット」指導の星野時男さんから・・・
「中学生が、皆で役割を分担しながら工夫して
いましたよ。とても感心しました」と。

今、地域で頑張っている中学生も、高校・大学へと進学し、社会人となり忙しくなってくると、なかなか地域では活動できなくなってくることと思います。それでも、いつかは中学生の時の思い出しながら地域に戻ってきて、様々なシーンで活躍してくれることを願っています。

（安藤 敏恵）

表紙の写真

公民館主催事業

小和田公民館では、毎年数多くの主催事業を行っています。この写真は事業の一コマです。

公民館のぞきみ隊

小和田公民館には、250を超える団体・サークルの登録があります。どの団体・サークルも楽しそうに活動しています。今回はその一部を、公民館だよりの中で紹介いたしました。

職員紹介

公民館の職員は、正規職員2名・再任用職員1名と社会教育嘱託員4名の計7名です。家庭教育に関する事業を始めとして地域の皆様に様々な学習機会を提供しています。利用者のみなさまが楽しく、気軽に利用していただけるよう、公民館運営に努めます。どうぞよろしくお願いいたします。



前列左から①米山明夫（館長）②神田一明③尾崎幸雄

後列左から④川田昌子⑤佐々木奈美⑥村松理花⑦染谷直子

①②は正規職員、③は再任用職員、④⑤⑥⑦は社会教育嘱託員です。

編集後記

- ◎ 昨年に引き続き、今年もお仲間に加えていただきました。今回の担当は、やや専門的な内容らしく、私には重荷ではないかと緊張感を持っていました。でもそのおかげで、わたし自身のよい勉強になりました。公民館の主催事業には、ぜひ多くの方が参加されることを願っています。（青木 君子）
- ◎ 11月初めのある日、「お掃除隊！」活動の一場面。リサイクル土の作り方を実践指導しながら、「こういうのを、“たがやす”というんだよ」と、大谷美恵子さん。耕すことから文化が生まれる、と子どもたちに教えたかったのかも。大谷さんは旭が丘の花屋さん。毎回、公園のプランターづくりの指導をされている方。公園の花のプランターを見たら、大人と子どものこんな出会いのあったことを、想像してほしいと思う。（佐々木 勝治）
- ◎ 今回も「公民館だより」編集員として小和田公民館とのつながりができ、いきいき脳の訓練の場として、また、職員の方々や同胞編集員の方々とも交流の場ができ大変ありがたく感謝しております。また、自分の思っていることを文章にすることの難しさ、試行錯誤しながらも完成させる楽しみを実感しました。（佐藤 博範）
- ◎ 公民館の事業に携わっている関係で、公民館だよりもお邪魔し、2年目となりました。今年も地域の視点から記事を書かせていただいております。また、公民館では毎年新しい事業がお目見えし、多くの方が楽しんでおられます。公民館っておもしろいことやっているんだね。楽しそうだね。たよりを読まれた方からそんな声が聞きたくて、編集員一同、ガンバってみました！ これからも愛される公民館でありますように……。 （安藤 敏恵）
- ◎ 今年もあっという間に、編集後記を書く時期になりました。「公民館だより82号」が発行できました。編集員の皆様には、ただ感謝するばかりです。（神田 一明）
- ◎ 今年はどんな記事にしようか……など考えているうちに、編集員の皆様の力添えをいただき、発行することができました。地域とのつながりを深く感じています。（川田 昌子）